

「・・・」

(所沢市民文化センター・ミュージズ・2015年3月〜2025年1月)



学生時代には大学のオケや京響の定期演奏会を楽しんだ。今の家に住むようになってからは、4キロ先にある、所沢市民文化センター・ミュージズで楽しんできた。

ミュージズには、パイプオルガンが備えた二千人収容のオーケストラと中・小のホールがあり、演奏会は多彩である。毎年、中村絃子と東京フィルのニューイヤークンサートで始まり、春秋には国内外演奏家の演奏会、年末の所沢フィルの第九演奏会で締めるのが私の音楽ライフであった。

中でも有難かったのは、午後3時からの新進演奏家やパイプオルガンの500円コンサート。十年ほど前、オルガン演奏を気持ちよく聴いていると、左脇腹を小突かれた感じがして、左耳に優しいが鋭い若い女性の声が聞こえた、「イビキ、イビキ」。居眠りしてしまっただけ。

かくて私の音楽ライフは終わったのである。ミュージズに隣接して所沢航空記念公園と所沢市立図書館があり散歩によく行くが、ミュージズに入ったことはその後一度もない。トラウマというのであろう。

(中津川勲坐)

パウル・クレー展 創造をめぐる星座

(愛知県美術館・2025年1月18日〜3月16日)



豊かな色彩と自在な線で描かれるパッチワークのように美しい画風に惹かれて、パウル・クレー展に出かけた。

しかしこの展覧会では、謎めいた抽象画のイメージや、画廊の販売戦略に用いられた「孤独な画家」とは違う、知られざるクレーの生涯が紡ぎ出されていた。

同時代の前衛芸術家達と刺激を与え合い、夢を共有しながら新しい表現を生み出していったクレー。第一次世界大戦における画家仲間の従軍と戦死、そしてその後のナチスによる弾圧は彼の芸術に大きな影響を与えた。特にナチスに「幼児的で錯乱した精神の現れ」と批判され、退廃芸術とみなされてベルンに逃れて以降、かつての理知的で繊細な作風から即興的で荒々しい作風に変わっていく様子が、彼の置かれた悲劇的状況を物語っていた。最後まで意欲的に創作に取り組み、困難な時代を生き抜いていった彼の言葉「芸術とは目に見えるものをそのまま再現するのではなく、目に見えないものを見るようにすることにある」は、短歌にも通じるものとして胸に響いた。

(山田恵里)